

【全体講評】

出典は南宋の李燾『続資治通鑑長編』。北宋の歴史を記した書である。字数も百九十字を切り、内容的にも特に難しい箇所はなく、やや易化したと言えるだろう。設問数も一時期七問になったが再び六問に戻り、設問のスタイルも新傾向のものではなく、オーソドックスなセンターの問題に戻ったと言つてよいだろう。

文章の内容は寇準の質問に嘉祐が答える対話形式で、用語や文法にも取り立てて難しいものはない。基本ができていれば読み解くのにそう苦労はしなかったと思う。今年はかなり高得点が期待できる内容だと言つてよい。

【設問解説】

問1

漢字の意味を問う問題。枝問ではなく組み合わせを選ぶ形式になり、どちらか一方の意味がわかれば正解できるのでやさしくなった。

×「議」は「準をどう議しているか」と尋ねているが、質問の意味を知りたかったら相手の答えを見ればよい。「すぐに宰相となるだろう」と答えているので、評価を問うているとわかる。

×「沢」に関しては、授業でも「①たっぷりある、②うるおす、③めぐみ・恩恵」の意味があると説明し、なでしこジャパンの澤選手の妹の「澤恵(さわ・めぐみ)」と覚えようと教えたとおり、ここは「恩恵」の意味。よって正解は③。

問2

I 直前の「平時は愚鈍のように見えるが」というのが手がかり。「ただ寇準だけが彼を理解していた」というのだから、「彼が愚鈍でないことを知っていた」で正解は①となる。

II 「知」には「知る・わかる」の他に「知事・知行」などという時の「おさめる・つかさどる」の意がある。ここは目的語が「開封府」であることから「おさめる」の意で③が正解。

問3

訓読問題の解法は繰り返し教えたとおり、①句形はないか、②置き字をチェック、③動詞はどれか、の3ステップで解く。まず句形は「不若」（比較）とすぐわかる。下に再読文字「未」があるのでその下の「為」は動詞とわかる。よって「未だ相と為らざるに若かず」となる。これだけでも④が選べる。解釈は当然「くの方がよい」なので②と③に絞れるが、意味を考えれば③が正解である。

問4

直前の文を見れば、「賢相が功績をあげられるのは、君臣が水と魚のようであるからだ」と言っているのだから、「賢相」の言や計が「君」に聴かれ従われるのはあきらかたで正解は③。ちなみに「聴」は「よく聞く」という意味の他に、「(主君が臣下の言葉を)聞き入れる、許す」という意味でもよく使われるのを覚えておこう。

問5

嘉祐が最後に「私があなたの名誉と人望が損なわれるのを心配する理由です」と述べているのだから、その前の嘉祐の説明の言葉すべてが理由。選択肢を見くらべると、まず寇準に天下の太平を期待するのは「人々」なので②と④に絞れる。直前に「皇帝に対して水と魚の関係か」と聞いているので、②が正解とわかる。

問6

選択肢を横に見くらべると「父の王禹偁もおそらく王嘉祐にはかなわない」が共通で、何がかなわないのかとというと「深識遠慮」とあるので、①「思考の適切さ」、②意志の強さ、⑤「言動の慎重さ」は消える。嘉祐の指摘の要点は「君臣が水魚のようであるか」ということなので「皇帝と宰相の政治的関係」について述べている④が正解となる。

【書き下し文】

嘉祐は禹^{かう} 偁^{うしやう}の子なり。嘉祐は平時は愚^ぐ 駭^{がい}のごときも、独り寇^{こう} 準^{じゆん}のみ之を知る。準開封府を知するに、一日、嘉祐に問ひて曰はく、「外間準を議すること云何^{いかな}」と。嘉祐曰はく、「外人皆丈人^{たんせき} 旦夕入りて相たらん」と。準曰はく、「吾子^{ごし}に於いては意^{おも}ふこと何如^{いかな}」と。嘉祐曰はく、「愚を以て之を觀るに、丈人未だ相と為らざるに若かず。相と為らば則ち誉望^{そこな} 損^{そこな}はれん」と。準曰はく、「何の故ぞ」と。嘉祐曰はく、「古より賢相の能く功業を建て生民^{うるお}を沢^{ゆえん}す所以は、其の君臣相ひ得ること皆魚の水有るがごとければなり。故に言聴かれ計従はれ、而して功名俱に美なり。今丈人天下の重望を負ひ、相たれば則ち中外太平を以て責^{もと}めん。丈人の明主に于けるや、能く魚の水有るがごときか。嘉祐の誉望の損なはれんことを恐るる所以なり」と。準喜び、起ちて其の手を執りて曰はく、「元^{げん}之は文章は天下に冠たりと雖も、深識遠慮に至りては、殆ど吾子に勝る能はざるなり」と。

【現代語訳】

王嘉祐は王禹偁の子である。嘉祐はふだんは愚鈍のように見えるけれど、ただり寇準だけが彼のことを理解していた。寇準が開封府を治めていた、ある日のこと、嘉祐に質問した、「世間では私のことをどう論評しているか」と。嘉祐が、「皆あなたが間もなく宰相になるだろう言っています」と答えると、準は「あなたはどうか思うか」と聞いた。嘉祐が、「私の見るところ、あなたはまだ宰相にならない方がよい。宰相になったらあなたの名誉と人望は損われるだろう」と答えると、準は、「どうしてか」と聞いた。嘉祐は、「昔からすぐれた宰相が功績や業績をあげ、人々に恩恵を施すことができた理由は、その君臣関係が魚と水のように良好だったからである。だからこそ彼の言葉が主君に聞き入れられ、政策が受け入れられ、その結果功績と名声が俱に讃えられるようになったのである。さて今、あなたは天下の大きな希望を背負い、宰相となれば国内の人も国外の人もあなたに世を太平とすることを求めるだろう。あなたは皇帝に対して、魚と水のような関係を保てるだろうか。私があなたの名誉と人望が損なわれるのではないかと危惧する理由がそれです」と答えた。準はそれを聞いて喜び、起ち上がって彼の手を執って言うには、「そなたの父は文章は天下に冠たるものであったけれども、深謀遠慮の鋭さにおいてはそなたには到底およぶまいよ」と。